2019年4月28日発行

大町山岳博物館友の会 第 179 号

ゆきつばき通信



行事のご案内(友の会主催事業)

針ノ木雪渓自然観察会

友の会発足時に良く出かけたフィールドです。慎太郎祭の翌週ですが、登山された 方も新たな視点でフィールドを見る機会になるかと思います。友の会も慎太郎祭の自 然観察班のお手伝いをしています。今回は腰原先生に同行いただき、山の鳥も含めて 教えてもらいます。針ノ木自然観察ガイドの有川さんにも案内いただきます。キヌガ サソウ、シラネアオイの良い季節です。昨年の爺ヶ岳カルデラの復習もあります。

《期 日》 6月9日(日) 午前8時~午後3時 小雨決行

《場 所》 扇沢 ⇔ 赤石沢出合(慎太郎祭会場)

集合解散 扇沢駅南側ゲート前 (大町市街から自家用車で 30 分ほどかかります。洞門出口手前左に無料の市営駐車場があります。そこから集合場所までは徒歩 5 分ほどです。)

参考路線バス時刻表:信濃大町駅前 7:10 → 扇沢 7:50

《対 象》 子ども~大人(片道2時間程度の雪渓歩き、山道歩き)

《募集人員》 20名 (会員のみ 会員知人同伴可 定員になり次第、締め切り)

《講師》 腰原正己さん 有川美保子さん

《参加費》 無料

《持 ち 物》 登山靴 (スノートレ、運動靴不可)・シャツ (長袖)・長ズボン・帽子・雨具 (上下別)・防寒具・手袋・携帯トイレ・水筒・昼食・サン

グラス・帽子・軽アイゼン・ストック類・

敷物・双眼鏡*・図鑑* *必須ではない

《申し込み》 5月31日(金)まで

電話・FAX または直接、友の会事務局へ (Tel/Fax0261-23-6334)

《緊 急 時》 当日連絡先 090-1217-9197 (丸山)

※残雪状況により、夏道だけになる場合もあります。



【報告】

ライチョウ公開記念特別講演会 [共催事業]

「ライチョウを守る 一ここまでわかったライチョウの生活一」 ライチョウ研究者、東邦大学理学部訪問研究員 小林 篤さん

《期 日》 3月17日(日) 午後1時00分 ~ 2時30分

《場 所》 山岳博物館 講堂

《参加者》 150 名

「ゆきつばき通信」178号でお知らせしました「ライチョウ公開記念特別講演会」が3月17日(日)に行われました。15日から大町山岳博物館にとっては、15年ぶりのニホンライチョウ一般公開がはじまり多くの方が見学に訪れている中での、記念講演会となりました。みぞれが降る中、開演1時間前に駐車場整備が行われるほどの盛況でした。講堂に90人分の座



席が用意されていましたが開演前にすでに満席となり、急きょ座席を追加して関係者 含めて 150 人近い聴衆となりました。講演中に熱心にメモを取る多くの参加者から、 ニホンライチョウ保護に高い関心と期待を寄せていることを痛感しました。

講師の小林篤先生(ライチョウ研究者、東邦大学理学部訪問研究員)の講演内容は、 ライチョウの分布、日本人とライチョウ、研究史、保護事業、域内保護での観察について等でした。項目毎に図解のまとめがあり、解りやすい講演内容であったと参加者の声を耳にしました。講演内容を編集部で要約して頂きましたのでご覧ください。

参加者の25%が大町市民、53%が長野県内、22%が県外からでした。地元の方々の 関心の高まりが伺えました。また、ライチョウサポーターの方と思われますが、関東 圏、愛知、大阪からの参加がありました。今回の記念講演に学び、ライチョウの保護 や環境保全の大切さを広めることが私たちに出来る活動と思います。4月27日~5月



6 日のゴールデンウィーク中に附属園まつりに 伴い「ライチョウ・ボランティアガイド」が予 定されています。主なガイド内容は博物館で用 意されます。ボランティアサークルに登録して 頂き、この機会にボランティアガイドをしてみ ませんか。皆様の参加お待ちしております。

(有川美保子記)

講演要約

主催者挨拶 教育委員会竹内次長 含む講師 紹介

15 年ぶりのライチョウ公開となった。今回の 講演会の開催は、友の会の協力を得ている。環 境省はライチョウの保護増殖事業を実施して おり、現在7羽が5館で公開された。飼育数は 29 羽である。特別講演会は、中村浩志先生の指 導のもと、乗鞍岳等でケージ保護により成果を 上げた小林篤先生のお話である。野生のライチ ョウで新たに分かったこと、域内保全、さらに 山岳環境保全についてお話いただける。

(自己紹介)東京日本橋生まれだか、祖父は長野県飯山の出。ライチョウの研究は、卒研で、鳥でもライチョウは飛ばないからと薦められてはじめた。それまで、山を知らなかった。研究では、月10~15日、5月から10月は山に入りライチョウと過ごしている。

(分布)

図鑑ではライチョウとなっている場合が多いが、ニホンライチョウ(日本の亜種)という。 特別天然記念物で絶滅危惧 I B類。冬は白く春になると色が変わる。

日本、世界でのライチョウの分布を示す。世界の中で一番南の集団である。アイスランドでは人の生活圏にいる。アリューシャン列島では海の近くに棲んでいる。ヨーロッパアルプス、ピレネー、日本、ロッキーでは山に棲む。世界的に山に棲んでいるわけではない。氷河期後の温暖化に伴って、北に移動したものと高いところに移動したものがいる。日本では本州中部にかろうじて生活している集団である。

(日本人とライチョウ)

日本では里地、里山、奥山と区分されていた。 山は稲作水源として山岳信仰につながった(保 全の対象)。山の上には神がいるという概念と なった。

歴史上では1200年頃後鳥羽上皇が「しら山

の松の木陰にかくろひてやすらにすめるらい の鳥かな」と詠んでおり、平安時代には知られ ていた。神聖な場所に棲む神の鳥となる。江戸 時代、絵札・お守りとして火事・雷除けとなっ た。神聖な存在で人を恐れない(個体差あり)。

海外では一部地域で狩猟鳥である。ヨーロッパ文化圏などは自然に対する価値観が異なる。スイスアルプスでは 3500mにも大きな駅がある。高山帯に町がある。牧畜も高いところで行われている。人と自然が一緒である。

日本では人が近づいても逃げない。人が畏敬の念をもって接してきた、人と自然とのかかわりの象徴であり、単に絶滅危惧種の生物ではない。明治期には狩猟された記録はあるが、明治の終わりには狩猟禁止になり、昭和30年には特別天然記念物になった。自由に捕獲できたのはわずかな期間で、人を恐れなくなったと考えている。

(研究史)

日本のライチョウの研究の歴史を踏まえて、どんなことがわかってきたか。

本格的な研究は 1960 年代からで、信大羽田 健三先生と大町山岳博物館が共同で爺ヶ岳を 主地域としてはじめられた。

羽田先生は、日本のライチョウの基本的な生態を解明した。一夫一妻、巣がハイマツの下にある、雛は9月末に独立するといった山の上での生活を明らかにした。日本の生息数は、なわばり×2.5倍(あぶれ雄を含む)とした。痕跡として大きな糞があれば、抱卵しているとして、縄張りとした。環境的に縄張りになりうるところも直接確認できないが含めた。ライチョウが棲んでいるすべての山岳を20年以上かけて調査し、1985年に3000羽という結果を得た。内、北アルプスに2000羽である。

羽田先生引退後、10 年間研究者がいなかった。中村浩志先生が50歳になってから、2000年代になってから再調査が行われた。主要な山

岳について概算である。その結果、数が減っていることが明らかになった。北アルプス、南アルプスともに減っている。南アは半分以下。全体で1700羽と推定された。これにより、本格的な調査に着手した。中村先生はライチョウを捕まえて調査する手法をとった。羽田先生は神の鳥に触れるのはまかりならぬと考えた。中村先生は絶滅の恐れのある希少鳥類と考えた。採血をして遺伝子を調べ、足環をつけて個体識別した。

遺伝的な組成から、ロシアの東の方から来たであろうと推定された。2-3万年前のことである。現在6系統が確認される。南アルプスと御岳以北の2グループに大別され、1万年は交流が無かったと見られる。

(保護へ)

いかにライチョウを守るか。乗鞍岳をモニタリング場所にしたのは、150羽程度の個体があり、他の地域と個体の交流が少ないこと、数が減っていないこと、アクセスが良いことがあげられる。観察により、冬の生活が明らかになった。冬は森林限界下まで降りる。餌の問題である。

日本のライチョウが生きるための戦略には 特徴がある。卵を守るか、ヒナを守るか、成鳥 を守るか。その段階と効率的な保護を考えなけ ればいけない。日本のライチョウは、一度に生 む卵の数が世界で一番少ない。1回6卵程度。 アイスランドは12個くらい。

なぜ少ないのか?成長生存率を見ていくと、 孵化 (7月) から独立 (9月末) までの減が大きい。1/10 になってしまう (1カ月で半数以下)。しかし、成長したものは海外のものより長生きする。独立するまでの死因は、7月の初めから中旬に孵化するが、年による気候の変動があり、梅雨末期の天候不順では低体温になったり採餌不良(母親の腹の下で過ごす時間が長い)となる。飛べないため、捕食者による捕食も多い。1カ月もすると飛べるようになり、体温調整もできるようになる。これより、独立するまでの期間の天候が予測できないため、いい 年に期待するようになった(いろいろな年にチャンスを残す)。アイスランドは捕食者が多いため、ワンチャンスに賭けている。

これにより、経年的に減っていることの理由が予測できた。もともとの捕食者は、オコジョ (卵・ヒナ)、イヌワシ、クマタカなど大型猛 禽類 (成鳥)であったが、最近はハシブトガラス、チョウゲンボウ、キツネ、テン、ニホンザルといった以前はいなかったいろいろな捕食者が山に上がった。卵から成鳥まで食べる。したがって、親の寿命が短くなる。個体数が減少する。新たな捕食者の侵入には、温暖化もあるが人の生活スタイルの変化もある。山にゴミを持ち込む。過疎化によって里〜里山のバリア機能がなくなった。里の野生動物の個体数が増えた。

(保護事業)

ライチョウの保護増殖事業計画が 2012 年に 策定された。これは、生息域内保全と生息域外 保全からなる。これは、車の両輪である。ここ では私のやっている域内の話を中心に説明す る。

域内:減少要因の特定と除去 個体数減少の 抑止

域外:動物園などで飼育方法の確立

南アルプス北岳でケージ保護を行っている。なぜ北岳か、かつて縄張りが63あったが18に、2014年には8個となった。個体数減少が著しいところである。北岳山荘に近いところに3個のケージを設置し3家族を二日ぐらいかけて誘導した。保護は、1か月間やる。天気の良い日は散歩もさせる。餌は、クロウスゴ、オヤマノエンドウ、イワツメクサ、ムカゴトラノオ、オンタデなどを、許可をとってケージ内でも与えている。域内のメリットは、母鳥が子にいろいろなことを教えることができる、食べられる餌や天敵への対処が教えられる。もちろん、人も見張る。慣れたら手はかからない。

成果について。2015年は2家族でヒナ10羽を放鳥、2016年は3家族ヒナ16羽を放鳥した。2か月後の確認で、 $10\rightarrow0$ 、 $16\rightarrow2$ であった。原

因は捕食者であった。テンが監視カメラに写った。環境省も乗り出し、小屋の周りで捕食者の除去を行った。2017年にテン8頭、2018年にテン5頭を捕獲した。その結果、2017年には16羽を放鳥して15羽残り、2018年には15羽を放鳥して11羽残った。効果があるといえる。2018年には20なわばりが確認された。ケージ保護と捕食者の捕獲を合わせて2019年も実施確認する。

(域内保護での観察より)

面白い行動も観察された。抱雛 (ほうすう) 中、母親が糞をしたところ、ヒナが糞を食べた。 ライチョウは餌として高山植物に9割依存し ている。植物はカロリーが低い。草食には大型 動物もいる。これは腸内の菌がエネルギー生産 を助けてくれている。植物を発酵したり、枯草 を食べて菌を増やして、菌を栄養とする。菌の 役割は、エネルギー生産の補助であったり、毒 素分解の役割を持つ。高山植物も食べられない ような工夫がある。ライチョウの菌はどこにあ るか?ライチョウは盲腸が大きい(肉食系の鳥 の消化管は単純)。ライチョウは糞が二種類あ る。ドロっとした盲腸糞、ぽろぽろした直腸糞 がある。雛は盲腸糞を食べた。雛が母親の菌を もらう仕組みだろう。ほぼ野生の食事で母親と 同居しているケージ保護の個体で検証した。飼 育はその機会が無い(さらに抗生物質も与えら れている)。域内・域外での糞の菌の比較(親・ 子)をした。3-4日して糞食があって、2-3週 間までで終わる。ケージ保護では一週間後には 母親とほぼ同じ数の菌を持つ。飼育下では成長 に伴って徐々に増える。菌の種類は、ケージは 親とほぼ同じ、飼育のヒナは持たない。将来、 飼育下のライチョウを山に帰す時、そのままだ と山で高山植物が食べられない可能性がある。 飼育下でも野生のような腸内細菌を持たせる ようにするにはどうしたらよいか検討してい る。

(まとめ)

遺伝的集団の違いが解ってきた。腸内細菌のことがわかってきた。食べ物調査もされた。個

体が集団になった時に、高山でどのような生活をしているか、集団の維持の仕方、卵は少ないが親が長生きであることがわかった。では、それらをどうやって守ればよいか。

研究をはじめて 50~60 年たった。いろいろなことがわかってきているが十分ではない。飼育個体は野外ではできない詳細な観察ができる。餌を変えたり実験的な調査もできる。野外でできない試みができるのが動物園の強み。今後は動物園と連携しながらもっと理解が深まると思う。

書籍紹介

ライチョウを絶滅から守る! 中村浩志 小林 篤 しなのき書房

初めてのフィールドワーク3 日本の鳥類編 共著 東海大学出版部

(質疑)

司会 質問を

1) 中央アルプス、白山でライチョウが見つかった。どこから来たか、仲間はいないのか、今後その山域でするべきことは?

小林)遺伝的な解析が済んでいる。白山のものは北アルプス型でメス一羽。メスの方が移動する。無精卵であった。仲間がいれば雛がいるはず。中央アルプスのものも北アルプスの型。御岳ではない。中央アルプスで増やすかは議論中で、新たな計画の中で議論される。

2) 自然にほっておけば減るのか、一定数で落ち着くか?

小林) 地域によって異なる。立山は安定である。 南アルプスは自然の振動の範囲外の減少。離れた小さな集団は絶滅しやすい。分布の周辺、特に火打など人の手が必要。事業計画も、自然状態でいかに維持できるかが最終目標ではある。 人間の生活の変化が結びついているので、壮大な話にはなる。私たちの意識を変えていくことがライチョウを自然状態で維持することにもっながる。

3) 火打でイネ科除去が行われている。南アル プスでの予定は?

小林) 北アルプス、南アルプスでは火打ほど差

し迫ってはいない。南アルプスはニホンジカの 侵入が問題である。中白根山頂ではシカにより 高山植物が食べられている。高山環境全体の保 全から考えていかないとライチョウの保全に 近づかない。火打は山が低く、他と環境が違う。 シカを捕る?柵で囲う?環境省は、国立公園な ど、手を一切出さずに見守るだけでは保全でき ない状況になっており、捕食者除去やイネ科の 除去など、人為的な介入をしないと本来の環境 は守れないと考えている。ライチョウ事業をき っかけに野生動物の管理が見直されれば、高山 環境保全につながる。ライチョウの事業はその 先駆けである。

4) ライチョウの体温は?山博の飼育個体は腸内の細菌の効果を調べる餌が与えられたか? 小林) 私は正確に測ったことはないが。

宮野) 体温は、偽卵に温度計を仕込んで計った。 最高 40℃が得られた。

小林) 細菌の培養の研究で、哺乳類の 36℃くらいではライチョウの菌は培養できず、40℃くらいが必要だった。

宮野) 菌種は飼育下でも調査した。生まれてす ぐはすごく少ない。1カ月で野生並みもしくは それ以上の菌の数になるが、種類が全く違う。 成長しても。菌種が少ない。自然の盲腸糞を与 えることのリスクは、食べているものによって 菌叢が違うこと。山と博物館では食物が違う。 山の上のライチョウにはコクシジウム*という 原虫がいる。雛で8割いる。それを持ちこむと 飼育下のヒナがコクシジウムにかかってしま う。大学の先生にライチョウにあった菌の開発 をしてもらっているが時間はかかる。飼育下で も親の盲腸糞を食べさせられれば、次善的に飼 育下の環境ではあるが、早めに菌叢が移行でき るのではないかと、各館でこれから取り組む。 小林) コクシジウムの除去も研究している。ト キでは腸内細菌の問題は考えられなかった。肉 食だから。山の上で植物だけ食べるという、非 常に面倒くさい鳥を平地で飼うと新たな問題 が出てくる。域内、域外が協力してトライして いる。新たな研究成果に期待されたい。

司会)小林先生には、ライチョウの不思議な生活やおかれている現状、保全の大切さを第一線でご活躍されている先生ならではの目線でわかりやすく説明いただいた。ライチョウ保護の大切さ、山岳環境保護の大切さを広めてほしい。

*https://www.osakafu-u.ac.jp/osakafu-content/uploads/sites/428/pr20180720.pdf



新しいライチョウ舎 と公開されている 2017 年生まれのメス 左下のモニターは友 の会からの贈呈品 (3/17)

【報告】平成31年度 山博友の会 総会・記念講演会

《期 日》 4月21日(日) 総会 午後1時00分~午後2時40分 講演 午後3時~午後5時

講演 「チベット・シェラプカンリ初登頂と高所順応」

- 1) 西田 均氏 「シェラプカンリ初登頂とチベット事情」
- 2) 杉田浩康氏 「高所登山と高所順応」
- 3) 西田・杉田氏 「標高 5000mの空気を体験してみよう」 [高所疑似体験]

《場 所》 山岳博物館 講堂

《参加者》 総会 22 名 講演 37 名

宮澤会長挨拶

友の会は山が好き、自然が好き、山博が大好きという人たちの集まりです。好き 勝手なことをやっていますが、館長はじめ博物館の皆さんには付き合っていただい ており、感謝します。

友の会では 40 周年記念事業を昨年やりましたが、昭和 53 年に再出発して、それから 40 年経ったということです。実際は友の会は、博物館が公民館活動からできてきたように、その時から同好の集まりとして始まっていました。

今年はライチョウが一般公開され、大きく注目される年です。博物館のはじまりは鳥でした。信濃大町の駅前にロータリーがあり、ハクチョウがいました。あそこにいた最初のハクチョウは、常盤で弱っていたものを農家の人が捕まえて保護していたものでした。それには先立つ話があり、木崎に白鳥が来ていて、それを撃ってしまった人がいました。それは、羽田先生の世話ではく製になり博物館に入りました。20 何羽来ていたうちの一羽を撃ったら一羽を除いていなくなり、残った一羽が常盤で捕まえられたのです。それが駅前ロータリーのケージに入れられました。これが博物館の始まりの一つです。

後にライチョウを調査、飼育することになり、今年15年ぶりにライチョウの一般公開が再開されました。時の流れもありますが、記念すべき年です。友の会でもライチョウのガイドを行いますが、会員も楽しみながら、博物館に迷惑をかけながらやっていきますので、これからもよろしくお願いします。

総会ですので、いろいろ意見を出して



いただき、当初の人たちの志した友の会のその意志を継ぐことと、また、新しいことをやっていきたいと思いますので、よろしくお願いします。

鈴木館長ご挨拶

4月から館長として山岳博物館に勤めることになった鈴木啓助です。3月まで信州大学に勤めていました。専門は地球は水の惑星といわれますが、水の循環を研究しています。水の中でも、最も好きなのはちょっとアルコールが入ったのが好きですが、次に好きなのは、水が冷たくなるとだんだん凍っていきますが、その凍った雪とか氷を主に専門にしています。もちろん流れる水も研究していますが、どちらかといえば寒い方が得意です。

友の会は昨年40周年を迎えられ、山博も68年目ということで、私よりも年長の 非常に歴史のある博物館、歴史のある友の会ということで、今後ともよろしくお願 いします。

連体にはライチョウのガイド等でお世話になります。私も山に登るのは好きで、ただ、花の名前を覚えるのは苦手で、この中にも花の得意な方がおられるのでぜひ教えていただき、この年になると新しいことを覚えるのは難しいでしょうが少しずつ覚えていきたいと思っています。

今後とも博物館を応援していただきたく、どう ぞよろしくお願いします。



参加されなかった皆さんには総会資料を同封しました。総会の議題は、いずれも 承認されました。講演内容については、次号で報告します。





記念講演会

烏帽子の会

活動報告 **小谷村スノーシュー** (3月例会)

《月日》3月9日(土) 《天気》快晴(コバルトブルーの空は絶品) 《参加者》8名

《コース状況:その他周辺情報》

午前 8 時小谷村役場に集合、コルチナスキー場に移動して白馬グリーンプラザホテルでトイレを済ませて8:25 スノーシューで出発する。ゲレンデ脇スネークコース端を登る。9:45 展望所まで登り終わりあやめ池上部に出る。雲一つない快晴で白馬山系の周辺の山が展望できた。西山林道を下り途中 11:00 早い昼食をとった。秋葉神社で杉巨木を見て虫尾滝を眺めて小谷村役場まで下った。



この先に何がある

今年は例年より 1 メートル以上雪が少なくて午前中は固い雪を踏みしめて登った コースも、午後になると溶け出して重い雪になってスノーシューは歩き辛かった。

《感想》

当初 3/10(日)に計画していたスノーシューの山行であったが、3/5(火)になって雨情報があった為、急遽参加者に連絡をして予定を前倒しして3/9(土)にした為都合がつかない方がでて大変申し訳なく思った。しかし逆に参加が可能になった方もいて8名で実施することができてほっとした。日を変更した結果天気は快晴で展望所では、中部山岳国立公園と妙高戸隠連山国立公園の2つの山々、白馬三山はもとより五竜、鹿島、爺、常念山



白兎の足跡

脈の山々、八ヶ岳、南アルプス、戸隠、火打、近くは小谷三山(中西山、東山、黒鼻山) まで全部見渡すことができて最高だった。

あやめ池は昔は役場からリフトがかかっていてスキー場だったとの事(今は木がはえてしまった為よくわからないが)。また少し登った。下りで「白樺・岳樺・ウダイ樺」の三種類の樺をみることができた。またクロモジの仲間の木の香りや小谷の地形の説明など、地元出身のリーダーの澤渡さんの話は興味深く聞くことができた。西山林道(昔はスキー場)を下った。途中山の神といわれている地域でずっと残されているブナの巨木を眺めた。周辺のブナは薪として切られたが山の神様の為ずっと拝まれてきたそうだ。秋葉神社まで少し登りあげた。また登るのかと疲れてきて不思議に思ってい

たら杉巨木がやはり御神木としてあるのでそれを見てもらいたかったとの事だった。 確かに周辺が6メートル以上もある見応えのある杉だった。虫尾の滝を見上げてから 役場まで一気に下った。田んぼの土手では土が出ていてふきのとうもみられてもう小 谷の春だった。

午前中の休憩の時には澤渡さんがクロモジ茶を持ってきてくださってその香りを楽しんだことを忘れていたので付け加える。今回は下見もせずに小谷村公認のスノーシューツアーガイドもされている澤渡さんにコースや途中の説明はすべてお任せした。本当にありがとうございました。

天候に左右される山の事、ましてや変わりやすい3月の天気に振り回され、初めて の幹事は冷や汗ものだった。

私事だが、夕方コンサート出演の為出発を1時間早めさせていただきご迷惑をおかけした。



「雪姿 北アルプスを 愛でながら 新雪踏みしめ 進む楽しさ」

《コースタイム》コルチナ雨中コース 5時間

8:00 小谷村役場駐車場~8:15 コルチナスキー場(トイレ等準備)8:25 出発~9:40 展望所(登り終わる) 9:50 あやめ池上部(休憩)~10:40 西山林道(山の神ブナ巨木)~11:00 昼食 秋葉神社御神体杉の巨木・虫尾の滝経由~13:15 小谷村役場 澤渡さんの車でドライバーさんだけコルチナスキー場に車を取りにいき 14:00 役場で解散

★ 5月例会のご案内・・小熊山北側 西海ノ口より猿ヶ城往復 及び 総会 5月26日 (雨天の場合、総会のみまたは延期)

担当:宮田·若林·吉田

サークル烏帽子の会へのお問い合わせは、事務局(電話:0261-23-6334)まで

サークル 2018 年活動報告・2019 年活動計画

烏帽子の会

現在24名の登録メンバーがいます。総会を兼ねて池田町の古城址散策を5月26日に、伊那市の陣馬形山を10月28日に、青木村の十観山を12月8日に、浅間の黒斑山を2月2日に、小谷村のスノーシューツアーを3月9日にそれぞれ行いました。7月に予定した中野市の高社山は台風接近で中止になりました。今年は2名の方に山頂での75歳誕生日祝いを行いました。

今年度は5月26日の小熊山北側-西海ノ口より猿ヶ城往復-と総会で活動をスタートさせます。

ゆきつばき通信および Web 上で詳しい活動報告を行っていますので、併せてご覧ください。

ボランティアの会

現在 32 名の登録メンバーがいます。サクラソウの除草や展示活動の補助、館周辺の清掃や環境整備、館内案内ガイド、各種事業の受付やサポート等を行っています。植物標本の整理や植物調査にも協力しています。研修は、富山市科学博物館友の会との交流を兼ねて富山市、白山市を訪れた他、館内ガイドの勉強会を行いました。活動の延べ人数は301人になりました。今年度は、大型連休のライチョウ舎での来館者対応をはじめ、例年のサポート活動を行い、また、自らのスキルアップを行いたいと思います。



ライチョウのガイドのための研修

花めぐり紀行

現在13名の登録メンバーがいます。

4月8日に博物館講堂で開催した総会では1年間の活動について話し合い、サークルとして協力した、博物館の研究である「ミズオトギリの送粉様式」について、担当の千葉学芸員から成果のまとめの発表がありました。

9月19日に「車山湿原をめぐる」を開催しました。当日は大安であったためでしょうか天候に恵まれ、秋の草花に目を向け観察を行いました。「アキノウナギツカミとヤノネグサはどこが違うのか」だとか、「アカテンオトギリなるものは、いったいどのような特徴を持つのだろうか」だとか、話に花が咲きました。

5月4日に居谷里湿原において開催された、市文化財センター主催の自然観察会では2名で講師を務めました。例年よりも花の進み具合が早く、ミズバショウやハナノキなどは盛りを過ぎていました。いつもとは違った植物たちに驚きながら、一生懸命に紹介しました。



6月3日に開催された針ノ木岳慎太郎祭で、自然観察班で講師を務めました。こちらも例年より花の進み具合が早く、思っていたのとは異なる植物の説明となりました。 そんななかで、いつものタケシマランとヒメイチゲに会えてほっとしました。

このふたつの観察会におきまして、長年にわたり講師を務め、昨年お亡くなりになられました友の会の会員でもあり、元山岳博物館館長でいらした倉科和夫先生の功績を偲ぶと共にご冥福をお祈り申し上げます。

◆植物調査研究への協力

- 1) 博物館の「高山植物の生活史研究」に伴う高山植物の植え替え作業を行いました。 研究成果のひとつとして、昨年新たに建設されたライチョウ舎の周辺に高山植物を 植え込み、山小屋をイメージした展示環境の充実を図ります。
- 2) 「高山植物の生活史研究」で、現地調査をしました。7月25~27日白馬岳で、主にイワオウギにやってくる昆虫の行動や撮影の記録に協力しました。オオマルハナバチなど、マルハナバチの仲間が観測されました。高山もやはり花が進んでいて、ウルップソウやミヤマオダマキなども、咲いている株が少なくて残念に思いました。
- 3) 8月23日、ミズオトギリにやってくる昆虫の行動観察と撮影を居谷里湿原で行いました。ミズオトギリが開花している時間は午後3時から午後7時くらいの4時間で、この間、どのような昆虫が訪れているのかについて観察しました。結果については、『市立大町山岳博物館研究紀要第4号』に掲載予定です。

◆植物分布調査への協力

この調査は長野県を 10 地区に分け、大北地域を受け持つ博物館が昨年度から本格的に実施しているものです。さく葉標本について学習し、小谷村と白馬村を中心に調査を行い、証拠標本にするため、約 500 点のさく葉標本を作製しました。

◆さく葉標本製作への協力

前項とは別に、博物館が所蔵する標本を台紙に張る作業ですが、平成 27 年よりは じめて、これまでに約 5800 点を作製しました。残すところあと 2000 点くらいかと推 測され、来年度には一段落するものと思われます。データは博物館から国立科学博物 館に提供され、日本のみならず世界から標本の情報がアクセスできるようになっているそうです。

○今年度の活動計画

- 1. 6月29日(土)~30日(日) ボランティアの会・花めぐり紀行合同研修会 白山高山植物園・石川ふれあい昆虫館(白山市)または6月19日(水)花めぐり 紀行13 せせらぎ湿原(山ノ内町)をめぐる
- 2. 4月~10月(第三日曜日)植物分布調査(池田町・白馬村・大町市)
- 3. 4月~翌3月 植物さく葉標本づくりの協力
- 4. 5月下旬~6月上旬(3日間)高山植物の植え替え作業協力
- 5. 5月3日(金)·4日(土) 居谷里湿原自然観察会 講師2名
- 6. 6月2日(日) 針ノ木岳慎太郎祭 自然観察班 講師2~3名
- 7. ゆきつばき通信および Web 上でサークル会員の募集と活動報告

山岳文化研究会

現在9名の登録メンバーがいます。30年度は4回の定例会を開催しました。メンバーは個人またはグループで研究テーマを設定し資料収集や研究しています。時間はかかるとは思いますが、成果を紀要への投稿や博物館での教育普及活動等に役立てていきたいと考えています。

※ それぞれ総会資料も参照ください。

サークル研修行事のご案内 北陸シリーズ 第二弾!

白山高山植物園~ふれあい昆虫館

これまで友の会またはサークルでは、東京都恩賜上野動物園や富山市ファミリーパーク、茶臼山動物園、昨年はいしかわ動物園等を見学し、種の保存や展示動物の行動や習性に配慮した展示手法を学んできました。

今年は、サークル「花めぐり紀行」と「ボランティアサークル」を中心として、山博とほぼ同じ標高また地形を活用し高山植物を展示する「白山高山植物園」と、小規模ながら室内と野外展示を連動させた生きものの展示を行っている「ふれあい昆虫館」(いずれも石川県白山市)を訪問し、山博付属園の潜在的価値を見出したいと思います。なお、白山高山植物園は白山の植物の保全のために標高800mの試験地で域外の保全保護活動に取り組んでおり、6月から7月15日までオープンガーデンが期間限定で開設されています。

《期 日》 6月29日(土)~30日(日)

《集合解散》 集合:午前6時30分(予定) 大町市役所 駐車場

解散:午後6時(予定) 同上

※金沢市内に宿泊の予定です。参加費は2万円前後と見込まれます。募集はサークルメンバーが優先になります。一般会員で参加希望の方は、友の会事務局までお問い合わせください。詳細は参加者にお知らせします。

ゆきつばき通信編集室より -

ライチョウの公開に伴って山博はにぎやかです。

今号は事業のお知らせ、ライチョウ講演会や総会の報告になります。各サークルからの報告も入りました。今年度は「針ノ木雪渓自然観察会」と「塩の道~鳥越峠を歩く~」を主催事業として計画しました。

文集の「ゆきつばき」も大きな遅れなく発行することができました(総会にこられなかった方には同封しました……確認ください)。またしばらくは「ゆきつばき通信」が会員の皆さんへの発信になります。今の通信の役割でスタートしたゆきつばきも多くの皆さんの投稿で支えられていたことは、バックナンバーをご覧いただければお分かりになるかと。というわけで、通信への皆さんの投稿もよろしくお願いします。

〔投稿先〕

編集担当丸山アドレス takuya-m@juno.ocn.ne.jp (件名に「ゆきつばき通信」等を付けてください) もしくは、山岳博物館の事務局に郵送してください。

(丸山卓哉)

山博ページ http://www.omachi-sanpaku.com/

友の会は、山博の情報発信のために山博ホームページの維持に協力しています

会費のご案内

会費振替口座番号 00550-2-24194 加入者名 山博友の会ファミリー 4,000 円 個人 3,500 円 学生 2,000 円

※ファミリー会員とは、同居または扶養家族をさします。学生会員とは、小学生~大学生までをさします。 4月が年度切り替えとなっています。中途入会の場合は年度当初にさかのぼって出版物等を配布します。 賛助会員につきましてはお問い合わせください。

ゆきつばき通信 第179号

発行/大町山岳博物館友の会 2019年4月28日

〒398-0002 長野県大町市大町 8056-1

大町山岳博物館内 山博友の会事務局 Tel/Fax 0261-23-6334